

プーシキン散文における機能動詞と 文体の「軽さ」との関係について*

金子 えつこ†

— 目 次 —

1. はじめに
2. 機能動詞を伴う構文について
3. 明示された動作主ではない一般名詞が主語に置かれて
いる構文について
4. おわりに

キーワード：プーシキン、散文、機能動詞

1. はじめに

機能語とは主に文法的機能を担い、語彙的意味をほとんど持たない語のことである。機能語である動詞は機能動詞または軽動詞と呼ばれ、各言語の中に多かれ少なかれ存在しているが、軽動詞の名の通り、本来の実質的な意味がより軽くなったり失われたりしている。動作内容を表現する機能をかわりに担っているのは、その機能動詞と結びついている名詞である。例えば、英語のmake, do, take, have, give, getなどは機能動詞としてもしばしば用いられることで有名であるし、また、日本語では動詞中に特別な位置を占める「する」「なる」が代表的な

* 本研究は、日本学術振興会2010年度科学研究費補助金(奨励研究)交付による課題研究である。

† KANEKO, Etsuko 本学非常勤講師

機能動詞である。日本語では他に「一致を見る」「誤解を招く」「失笑を買う」といった例における「見る」「招く」「買う」のような機能動詞もある。これらの三例における動詞は、本来の「見る」「招く」「買う」という動作を表す語義での使用、すなわち語彙の意味を伴う用法の場合は機能動詞とは呼ばれない。そして、この語彙の意味を伴う用法での使用頻度の方がはるかに高く、機能動詞化するのは特定の名詞との連結によってのみであるため、その機能動詞化の頻度はこれらの三例の場合は低いといえる。

いずれにせよ、機能動詞と連なって動作を表す名詞(以下、動作名詞と呼ぶ)は、動作を表現できるとしても動詞の文法的機能までは代替できないため、その動作名詞に連なる機能動詞と動作名詞本体とは、しばしば緊密な関係、すなわち共起関係を持ち、特定の構文や枠組を形成している場合が多い。日本語学においても英語学においても、このような機能動詞の構文や枠組についての研究はしばしば見られ、活発な議論が展開されている。

転じてロシア語における機能動詞について注視するに、日本語学の「する」に関する研究と比較すると学問上の関心は著しく高いとは言えない。また、ロシア語においては前置詞 y を伴う構文でも所有表現ができるという事情もあり、たとえば機能動詞になりうるロシア語動詞 иметь は類似の意味を持つ英語の have と比較して頻度が低い⁽¹⁾。しかし、これらの事情にもかかわらず、ロシア語動詞 иметь を含むいくつかの基礎語彙の動詞が十九世紀初頭の言語上の変革期に機能動詞としてしばしば用いられていることについては、西欧言語の影響を含む近代ロシア語の成立過程を分析する上で着目すべきことと考えられる。そこで本稿においては、その時期に言語史上極めて重要な役割を果たしたプーシキン⁽²⁾の言語における機能動詞を中心に分析を試みる。

機能動詞になりうる動詞の中で代表的なものの一つに、先述の иметь がある。 иметь の語義は「何々として持つ」「所有する」などだが、やや文語的であるため、英語の have 動詞のように日常でしばしば用いる語ではない。「手に持つ」という意味の動詞は基礎語彙である держать (英語の keep の語義に近い) が別に用いられるし、具体的事物の所有表現、例えば「私は本を持っている」といった初級文法練習問題に出るような文例の場合には、動詞 иметь は用いず、前置詞 y を用いて「私のところには本がある」という形にするのが普

通である。以下にプーシキンの小説より、「持つ」の意味でиметьを用いた例⁽²⁾をあげる。

Маша имела прекрасный голос и большие музыкальные способности; Дефорж вызвался давать ей уроки.

マーシャはすばらしい声とゆたかな音楽の天分を持っており、デュフォルジュは稽古をつけてあげようと申し出た（『ドゥプロフスキー』）。

Я стоял на веревочной лестнице и не имел довольно места, чтоб сделать приличный реверанс, и совершенно замешался, что отроду со мною не случалось.

私は縄梯子の上に立っていて、礼にかなう正式なお辞儀をするためには十分な場所を持っていなかったのだ。あんなにまごついたことは生まれて初めてだったよ（『ピョートル大帝の黒人』）。

以上の二例はиметьを機能動詞として用いているのではなく、その表現された内容も従来の語彙的意味に近い。ただし第二の例は、「場所を持つ」という表現があまり一般的ではないことと、発言者が洋行帰りでフランス語に堪能であるという設定から、西欧風の空気をまとわせるためのиметьの使用という面もあるのではないかと考えられる。

ここで、機能動詞の特徴の一つである基礎語彙の使用について述べると、どの言語においても「持つ」「する」「作る」といった基礎語彙の動詞がやはり機能動詞として用いられやすいのだが、これらの基礎語彙の使用がマルティネの言う「言語の経済性」、すなわち言語表現の際の負担量を減らしたいという方向性に適しているという面も考えられる。ただし一般に文学作品においては、日常における発話ほどには「言語の経済性」への志向が顕著ではない。日常会話では人間が簡便に迅速に話したいため統語レベルでも音素レベルでも省略が増える傾向にあるが、小説や詩作品では表現の芸術性や正確性を高めることもまた重要であるため、表現のための負担量は最優先ではないのである。一方で難解すぎて読者に理解されないほどでは困るので、作家は各自、自分の芸術的志向と読者への奉仕心とを折り合わせて各々の文体を生じさせるというのが実情であろう。もっとも、

中には読者への奉仕心など皆目見当たらないように見える複雑かつ難解な文体で、なおかつ幅広い読者層の支持を受ける作家も存在する。彼らの中の大部分はおそらく最初から難解な文体にすることを意図したのではなく、自分なりの表現を構築した結果、たまたまそれが難解と言われがちな種類の文体となったと考える方が自然である。しかし、逆に基礎語彙を多用する作家の場合は、より簡潔な文体を意図して熟慮し「経済性の強い」語彙を選択していることが考えられる。以上より、基礎語彙の使用が文学作品の中で見られることについては、言語の経済性の観点も無視できないが重視しすぎてもならない。プーシキンは確かに散文の簡潔さを重要視して様々な文体を試みていたし、そのことが彼の小論文や批評文、書簡からも読み取れるのだが、そうではあっても機能動詞を用いる動機が単に簡潔さや経済性のためだけであるという結論は期待できないと考えられる。

2. 機能動詞を伴う構文について

プーシキンの動詞の含有率の高さは知られているが、動詞の含有率の高い文体は一般に、より簡潔とされる。ロシア語文ではないが、1960年のマイルズの研究によると、英国詩人の作品中で名詞、動詞、形容詞が全体に占める割合は節の長さに関係し、たとえばJ.ミルトンのような、一文が比較的長く装飾の多い華麗な文体の場合は、SVやSVO、SVCなどの動詞を多用する比較的短文である構文が多い文体と比較して、一節の終わりがなかなかやってこない感触がある、という。⁽¹⁾ミルトンは6720語中、形容詞1200、名詞1550、動詞770であって、ミルトンより数十年早く、より簡潔で口語的文体とされる詩人J. ダンは7100語中、形容詞660、名詞1300、動詞1230であった。動詞の含有率は、仮に機能動詞を多用する場合は、動詞一語でも表現可能な内容を機能動詞＋動作名詞の二語で表現するのだから、理論上は下降してゆく。十八世紀後半から十九世紀初頭には、ドイツ語やフランス語などの西欧言語の影響下でロシア語における機能動詞の頻度は高まっていたと考えられ、それにもかかわらずプーシキンが動詞の含有率の高さを保持していることは、彼が、機能動詞の用法を自らの文体に取り込みつつも、語数の少ない短文の中に動詞を多用した独自の文体を構築していったことを示していると考えられる。

(1) 2 A. 動作、物事の状況を表す名詞を伴う機能動詞

プーシキン散文に見られる機能動詞を伴う構文の中で、その動詞にかかわる名詞が「質問」「合図」「影響」など動作や物事の状況を示している例がいくつか見られる。これらの文においては、「質問する」「合図する」「影響する」といった一語の動詞が選択されていないことで文体上の様々な効果があり、その中の顕著な一つとして、文の印象を西欧風にするという効果がある。つまり、機能動詞とこれらの名詞のコロケーションは、ドイツ語やフランス語を連想させる文型なのである。また、3 C.にも事態や状況を示す表現の例がまとめられているが、それらと比較するとその文の表現内容が全体に動的であって、動作主の積極的な態度や動作を表す動作名詞が「する」「持つ」などの基礎語彙に接続している場合が多い。以下にその例をあげる。

Наши любовники были в переписке, и всякий день видались наедине в сосновой роще или у старой часовни. Там они клялись друг другу в вечной любви, сетовали на судьбу и делали различные предположения.

我らが恋人たちは文通をしていた、そして毎日、松林か古い礼拝堂のほとりで二人きりで会うのだった。そこで彼らは互いに永遠の愛を誓い、運命を嘆き、さまざまの心づもりをするのだった（『吹雪』）。

В самом деле, она была красавица. Граф представил меня; я хотел казаться развязным, но чем больше старался взять на себя вид непринужденности, тем более чувствовал себя неловким.

実際彼女は美人だった。伯爵が私に引き合わせた。私は打ち解けたようにしたかったが、自然な様子を取るうとすればするほど自分がぎこちない気がしてしまうのだった（『その一発』）。

Барышня подняла голову и сделала знак молодому человеку. Он вспомнил, что от старой графини таили смерть ее ровесниц, и закусил себе губу. Но графиня услышала весть, для нее новую, с большим равнодушием.

令嬢が頭をあげて若者に合図した。彼は、年取った伯爵夫人からは同年者の死を隠すことを思い出し、くちびるをかんだ。しかし伯爵夫人は、自分にとって新しいこの知らせをきわめて平静に聞いた（『スペードの女王』）。

Ее военные действия имели желаемый успех: по крайней мере, Бурмин впал в такую задумчивость и черные глаза его с таким огнем останавливались на Марье Гавриловне, что решительная минута, казалось, уже близка.

彼女の軍事作戦は望まれたような成功を持った。少なくともブルミンの、思いに沈んだ様子、そしてマリヤ・ガヴリーロヴナに火のように燃えたって注がれる黒い眼が、決定的な瞬間の切迫を物語っていた（『吹雪』）。

На другой день в манеже мы спрашивали уже, жив ли еще бедный поручик, как сам он явился между нами; мы сделали ему тот же вопрос. Он отвечал, что об Сильвио не имел он еще никакого известия.

次の日、馬場で私たちが、あのかわいそうな中尉はまだ生きているかしらと訊ね合っていると、私たちの間にその当人が現れた。私たちは彼に同じ質問をした。彼は、シルヴィオからまだ何の知らせもないと返事した（『その一発』）。

Графиня имела обыкновение поминутно делать в карете вопросы: кто это с нами встретился? — как зовут этот мост? — что там написано на вывеске?伯爵夫人は箱馬車の中では絶え間なく質問する習慣があった。お会いしたのはどなたなの。この橋は何と言う名なの。あの看板には何と書いてあるの（『スペードの女王』）。

上記の二例「質問をする」については、⁽⁵⁾ドプロボルスキーが、この д е л а т ь в о п р о с ы というコロケーションが長く保たれ、時代が下ってもトルストイの作品に見られることを指摘している。また、同じ論文の中でドプロボルスキーは上記の к а к з о в у т э т о т м о с т ? という表現にも触れ、動詞 з в а т ь 「呼ぶ」と無生物を表す語である「橋」との組み合わせは明らかに標準的でないとしているが、この表現にもフランス語の影響が認められる。

Она смотрела за ним, как за ребенком, напоминала ему о времени пищи и сна, кормила его, укладывала спать Андрей Гаврилович тихо повиновался ей и кроме ее н е имел ни с кем сношения.

彼女（息子の元乳母）は彼（老主人）を、まるで赤子のように見て、食事や就寝の注意をし、食べさせ、寝かしつけた。アンドレイ・ガヴリーロヴィチは静かに彼女に服従し、彼女以外

に誰とも交渉をもたなかった（『ドゥブロフスキー』）。

Мы окружили его, и игра завязалась. Сильвио имел обыкновение за игрою хранить совершенное молчание, никогда не спорил и не объяснялся. 私たちは彼をとりまき、勝負が始まった。シルヴィオは勝負の間はまるきり黙りこみ続け、決して口争いをしたり弁解をしたりしない習慣を持っていた（『その一発』）。

—Как не знать, ваше сиятельство; мы были с ним приятели; он в нашем полку принят был как свой брат товарищ; да вот уж лет пять, как об нем не имею никакого известия. Так и ваше сиятельство, стало быть, знали его? 知っているどころではありません、伯爵。私どもは友人でした。彼は私どもの連隊で同僚も同然の扱いをうけていました。もう五年というもの、何の消息も持ちませんが。では伯爵も彼をご存じだったのですか（『その一発』）。

Напрасно возражала она самой себе, что беседа их не выходила из границ благопристойности, что эташалость не могла иметь никакого последствия, совесть ее роптала громче ее разума.

二人の会話は礼儀正しさの範疇から外れてはいなかったし、あのようないたずらなら何の結果も持ち得ない、と彼女は自分に空しく反駁したが、彼女の良心は彼女の理性より大声で不平を言うのだった（『百姓令嬢』）。

…;почти все почтовые тракты мне известны несколько поколений ямщиков мне знакомы; редкого зрителя не знаю я в лицо, с редким не имел я дела; любопытный запас путевых моих наблюдений надеюсь издать в непродолжительном времени;

駅馬車道はほとんどすべて知っている。数代にわたって御者を知っている。顔を知らない駅長は稀であるし、親交を持たなかった駅長も稀である。旅中の珍しい見聞談が大分たまったものを、そのうちに出版したいと願っている（『駅長』）。

На другой день она велела позвать мужа, надеясь, что домашнее наказание

над ним подействовало, но нашла его непоколебимым. В первый раз в жизни она дошла с ним до рассуждений и объяснений; думала усостыть его, снисходительно доказывая, что долг долгу розь и что есть разница между принцем и каретником. —Куда! дедушка бунтовал. Нет, да и только! Бабушка не знала, что делать.

次の日彼女は、この家庭の罰が夫に効力があつたことを期待して夫を呼びつけたが、夫の揺るがしがたいことが分かった。生まれてはじめて彼女は夫の前に反論や言い訳をするにいたり、借金にもいろいろと種類のあること、公爵と馬車大工とは違いがあることをへりくだって訴えて、彼を恥じ入らせようとした。どうしたことか!おじいさんは反逆のままだ。だめ、それだけ!おばあさんは途方にくれてしまった (『スペードの女王』)。

動詞 дошла に前置詞 до という組み合わせは一般的だが、дошла до に「反論」「言い訳」という語を後置するというコロケーションはあまり慣用的ではなく、通常は動詞 снизошла を用いることが一般的である。ここでは、例外的な組み合わせをあえて出現させ、より基礎的な動詞 дошла を用いることで、斬新さと簡潔さを持たせつつ動作名詞に意味上の比重を移していると考えられる。

«Подумайте о том, что делаете, —сказал ему герцог, —Россия не есть ваше отечество; не думаю, чтоб вам когда нибудь удалось опять увидеть знойную вашу родину; но ваше долговременное пребывание во Франции сделало вас равно чуждым климату и образу жизни полудикой России.

「何をしようとしているのかを、よく考えてみてください」と彼に公爵は言った、「ロシアはあなたの故国ではない。ふたたびあの熱帯の故郷をみるができるとも思えない。しかし、あなたがフランスに長い間住んでいたことが、なかば野蛮なロシアの生活習慣を、同じくらい縁遠くしているのではないでしょうか」(『ピョートル大帝の黒人』)。

Опытность давала ему перед нами многие преимущества; к тому же его обыкновенная угрюмость, крутой нрав и злой язык имели сильное влияние на молодые наши умы.

経験が私たちより多くの卓越性を彼に与えていた。のみならず、彼の平常の沈鬱さ、激しい

気性、そして毒舌が、若い私たちの人心に強い影響力を持っていた（『その一発』）。

上記の例文については3A.において主語Опытностьなどを検討する。

Он верил, что мертвая графиня могла иметь вредное влияние на его жизнь, и решился явиться на ее похороны, чтобы испросить у ней прощения. 彼は亡き伯爵夫人が自分の人生に有害な影響を持つ(たたる)こともできると信じて、ゆるしを乞うため彼女の葬儀に出ることに決めた（『スペードの女王』）。

Однажды осенью матушка варила в гостиной медовое варенье, а я, облизываясь, смотрел на кипучие пенки. Батюшка у окна читал Придворный календарь, ежегодно им получаемый. Эта книга имела всегда сильное на него влияние: никогда не перечитывал он ее без особенного участия, и чтение это производило в нем всегда удивительное волнение желчи.

ある秋の日、母が客間で蜂蜜のジャムを煮ており、私は舌なめずりをしながら泡だつ薄膜を眺めていた。父は窓際で毎年送られてくる宮中年鑑を読んでいた。この本はいつも父に強い影響を持っていた。特別な感情移入なしには父はこの本を読み返せなかったし、これを読むことはいつでも驚くほどの痼癪のような興奮を生んだ（『大尉の娘』）。

以上の三例にはвлиняние「影響」という動作名詞が共通して用いられている。この名詞は、動詞оказывать「与える」とのコロケーションの方がиметь「持つ」を用いるより標準的である。また、ロシア語においてしばしば用いられる動詞влиять / повлиять「影響する」が選択されていないことにも注意したい。加えて、влиняние「影響」はフランス語 influence からの借用訳であること、フランス語にもavoir beaucoup d'influence といった表現があることから、иметь влиняние が西欧言語の影響を受けた表現であると推測できる。

(2) 2 B. 心の動きや状態を表す名詞を伴う機能動詞

ここでは、「好意を持つ」「夢を持つ」というような、心の動きや状態を表す名詞を伴う機能動詞と考えられる例文をあげる。これらのコロケーションの必然

性は高いとは言えない。たとえば「愛を持つ」という表現をしなくとも「愛する」という一語の動詞を選択することもできたはずであるし、「知識を持つ」はより一般的な表現である動詞「知る」を用いることもできたはずである。あえて用いられたこれらの表現がもつ特定の印象の一つとして、貴族的な雰囲気醸し出していることがあげられる。これらの文章はいずれも語り手が貴族であったり貴族の生活について語られていたりするという背景があり、この構文自体の印象が相乗効果を生み、段落全体が、より貴族的な印象を与えている場合が多い。以下にその例をあげる。

Послушай, Ибрагим, последуй хоть раз моему совету; право, я благоразумнее, чем кажусь. Брось эту блажную мысль. Не женись. Мне сдается, что твоя невеста никакого не имеет особенного к тебе расположения.

聞きたまえ、イブラギム、一度でいいから私の忠告を。こう見えても私はなかなか善智識なのだよ。この馬鹿げた考えをなげうってくれ。結婚するな。君の許嫁は君に何の特別な好意も持っていないと私はにらんでいる（『ピョートル大帝の黒人』）。

Рассеянные жители столицы не имеют понятия о многих впечатлениях, столь известных жителям деревень или городков, например об ожидании почтового дня:

とりとめのない日々の都会人は、村や田舎町の住民たちには本当によく知られている多くの印象についての知識を持たない。たとえば郵便の着く日を待つことなどである（『その一発』）。

Я старался казаться веселым и равнодушным, дабы не подать никакого подозрения и избежать докучных вопросов; но, признаюсь, я не имел того хладнокровия, которым хвалятся почти всегда те, которые находились в моем положении.

どのような疑いをも与えないために、そしてうるさい問いただしを避けるために、私は陽気に平静に見えるよう努力した。しかし認めるが、私は冷静さを欠いていた。私の立場に身を置いた人たちがほとんどいつも自慢する、あの冷静さである（『大尉の娘』）。

Впрочем, он был скрытен и честолюбив, и товарищи его редко имели случай

посмеяться над его излишней бережливостью. Он имел сильные страсти и огненное воображение, но твердость спасла его от обыкновенных заблуждений молодости.

そうではあるが、彼は打ち解けない野心家であって、彼の朋友が自分の過度な儉約を笑いものにする機会をめったに持たなかった。彼は強い情熱と燃えるような夢想とを持っていたが、堅固さが彼をありがちな若気の過ちから救っていた（『スペードの女王』）。

Татьяна Афанасьевна поминутно справлялась с ее мнениями и руководствовалась ее советами; а Наташа имела к ней неограниченную привязанность и доверяла ей все свои мысли, все движения шестнадцатилетнего своего сердца.

タチアーナ・アフアナーシエヴナは始終彼女の意見を訊いて、その忠告に従った。ナターシャときては、限りない愛着を彼女に持ち、彼女にすべての自分の考え、十六歳の心の動きのすべてを打ち明けていた（『ピョートル大帝の黒人』）。

(3) 2 C. 思考、望み、必要などを表す名詞を伴う機能動詞

ここにあげられた文例において機能動詞に後置される語は、「見解」「もくろみ」「希望」「必要」などの語で、思考、望み、必要を表す名詞である。3 B.においても動作主の思考や気持ちを表した名詞が取り上げられているが、それらと比較すると、この2 C.における例では、用いられる語同士の結合が、より標準的である。つまり、予想できるコロケーションが比較的多い。ロシア語においては、必要や希望を述べる際、主格主語で *я х о ч у* と表現する場合もあるが、*м н е х о ч е т с я*、*м н е н у ж н о* のように動作主体を与格で表す場合も多い。2 C.に見られるような動詞「持つ」＋名詞「必要」という構文の場合は「彼は」のように主格主語を用いるため、動作主体を斜格で表すことがしばしばあるロシア語において、主格で主語を表したいというかなり強い意図をもって組まれた構文という可能性もある。つまり、いわゆる「手垢のついた表現」を避けつつ、動作主体が持つ望みの強さやもくろみの堅固さ、また逆に気力のなさを、主格主語で表現しているということであり、その人物が主体的にはっきりと望む、あるいは、まさにこの人物が気力を失っている、といったことが明示され、明快さや軽

やかさを伴う文体が表出していると言える。以下にその例を示す。

Какое мнение будет он иметь о ее поведении и правилах, о ее благоразумии?

С другой стороны, Лизе очень хотелось видеть, какое впечатление произвело бы на него свидание столь неожиданное...

彼女の品行や習慣について、彼女の常識について、彼はどのような見解を持つだろうか？

一方では、このような予期せぬ会見が一体どのような感動を生じるか、リーザはとても見たかった（『百姓令嬢』）。

Дело стало тянуться. Уверенный в своей правоте Андрей Гаврилович мало о нем беспокоился, не имел ни охоты ни возможности сыпать около себя деньги, и хоть он, бывало, всегда первый трунил над продажной совестью чернильного племени, но мысль соделаться жертвой ябеды не приходила ему в голову.

事件は長引いてきた。自分の方が正しいと信じるアンドレイ・ガヴリーロヴィチは少ししか心配せず、周囲に金をばらまくことには、やる気も資力も持たなかった。いつも小役人根性をあざ笑う第一任者だったというのに、自分が讒言の犠牲者になるなどという考えは頭に浮かんでこなかった（『ドゥブロフスキー』）。

《А отколе ты?》—продолжал старик. Владимир не имел духа отвечать на вопросы.

「ところで、お前さんはどこから来たね？」と老人は続けた。ウラジーミルはその質問に答える気力もなかった（『吹雪』）。

Он имел непрестанную нужду в рассеянии и непрестанно скучал.

彼（公爵）は気晴らしにおいて間断なき必要を持っていて、そして絶え間なく退屈していた（『ドゥブロフスキー』）。

—Не пугайтесь, ради бога, не пугайтесь! —сказал он внятным и тихим голосом. —Я не имею намерения вредить вам; я пришел умолять вас об одной милости.

「怖がらないで下さい、お願いします、怖がらないで」と彼は明瞭な静かな声で言った。「私はあなたを害するもくろみを持ってはいません。あなたにおりいってのお願いがあつてまいりました」（『スベードの女王』）。

Слуга, бывший тогда со мною, умер в походе, так что я не имею и надежды отыскать ту, над которой подшутил я так жестоко и которая теперь так жестоко отомщена.

当時私付きだった従僕は戦地で亡くなりましたし、そういう次第で、私は、あの私が残酷にも愚弄した婦人、そして今ではこんなにも残酷に復讐したあの婦人を、探し出す望みも持たないのです（『吹雪』）。

3. 明示された動作主ではない一般名詞が 主語に置かれている構文について

ここでは、動作主である人物が文中で明示されているのにもかかわらず、その人物を主格主語で表さずに一般名詞を主語としている文について取り上げる。このような主語の設定は、物語の展開上、文またはフレーズを一つ以上省略することができ、結果として物語の展開速度があがり、いわば冗漫さを避けることができる。以下に、三つに分類しつつ、その例をあげる。

(1) 3 A. 主語が動作主の特徴や身体の一部を表す場合

「気性」「毒舌」「手堅さ」など動作主の特徴を表したり、また、「瞳」「青白さ」など動作主の身体の一部を表したりする語が主語とされている例文をあげる。これらの表現は比較的基礎語彙と結びつきやすく、平易な動詞を用いることで軽快な印象を持つ文体となっている。描写を簡潔にするため一文に多くの新情報を入れる手段としても、このような主語の設定は有益である。

Ему было около тридцати пяти лет, и мы за то почитали его стариком. Опытность давала ему перед нами многие преимущества; к тому же его обыкновенная угрюмость, крутой нрав и злой язык имели сильное влияние на молодые наши умы. Какая-то таинственность окружала его судьбу;

年は三十五ほどだったので私たちは彼を年寄り扱いしていた。経験が私たちより多くの卓越性を彼に与えていた。のみならず、彼の平常の沈鬱さ、激しい気性、そして毒舌が、若い私たちの人心に強い影響力を持っていた。何かしら一種の神秘が彼の運命を包んでいた（『その一発』）。

この段落はシルヴィオに関する描写だが、「彼が」や「シルヴィオは」といった主格の主語は用いられず、斜格のみで彼が表されている。それにもかかわらず一人の人物をこれほど簡潔かつ的確に、しかも生き生きと表現ゆたかに描いている、その言語上の技術にも注目したい。

Характер мой вам известен: я привык первенствовать, но смолоду это было во мне страстию.

私の性格はあなたもご存じでしょう。私は一番になりたいたちで、これは若い頃からの私の情熱でした（『その一発』）。

—И ты ни разу не соблазнился? ни разу не поставил на руте?. Твердость твоя для меня удивительна.

それで君は一度も釣られなかったよね? 一度もルテを張らなかったじゃないか? 君の手堅さには恐れているよ（『スペードの女王』）。

Мрачная бледность, сверкающие глаза и густой дым, выходящий изо рта, придавали ему вид настоящего дьявола. Прошло несколько минут, и Сильвио прервал молчание.

陰鬱な青白さ、きらきらした両眼、そして口から吐き出す濃い煙が、彼をまぎれもない悪魔の形相にしていた。何分か過ぎた、そしてシルヴィオが沈黙を破った（『その一発』）。

Черные глаза оживляли ее смуглое и очень приятное лицо. Она была единственное и, следственно, балованное дитя.

黒い瞳が、彼女の浅黒いとても感じのよい顔を活気づけていた。彼女は一人っ子だった、したがって、甘やかされっ子だった（『百姓令嬢』）。

(2) 3 B. 主語が動作主の思考や動作を表す場合

ここで取り上げるのは、「告白」「好奇心」「狼狽」「あいびき」など、主語が動作主の思考や動作を表す語である例文である。これらの主語に対応している動詞の方は、概して情報性の高い、基礎語彙でないものが多い。2 C.において取り上げた表現と内容的に近似である文であっても、2 C.においては機能動詞によって軽やかさを伴わせているのに対し、3 B.においては、同じようにヨーロッパ風の文体でありながら、基礎語彙ではなく、語と語のコロケーションの意外性によって軽さを表出している。

Я смотрел на Сильвио с изумлением. Таковое признание совершенно смутило меня. Сильвио продолжал.

私は驚きをもってシルヴィオを見た。このような告白はまったく私を混乱させた。シルヴィオは続けた（『その一発』）。

Я прекратил свои вопросы и велел поставить чайник. Любопытство начинало меня беспокоить, и я надеялся, что пунш разрешит язык моего старого знакомого.

私は質問をやめて、ポットを置くように頼んだ。好奇心が私を不安にし、そして私は、ボンス酒が私の年取った知り合いの舌を解いてくれるのではと期待した（『駅長』）。

Черные глаза оживляли ее смуглое и очень приятное лицо. Она была единственное и, следственно, балованное дитя. Ее резвость и поминутные проказы восхищали отца и приводили в отчаянье ее мадам мисс Жаксон, сорокалетнюю чопорную девицу, которая белилась и сурьмила себе брови два раза в год перечитывала «Памелу», получала за то две тысячи рублей и умирала со скуки в этой *варварской России*.

黒い瞳が、彼女の浅黒いとても感じのよい顔を活気づけていた。彼女は一人っ子だった、したがって、甘やかされっ子だった。彼女のおふざけと絶え間ないいたずらは父を有頂天にさせた、そして、彼女の家庭教師ミス・ジャクソンを絶望に陥らせたが、このミス・ジャクソンとは四十歳になる堅苦しい老嬢で、白くおしろいをぬり、眉を眉墨で染め、年に二度『パメラ』を読み返し、その報酬に二千ルーブルをもらい、「このロシアという野蛮国」で退屈

で死にそうにしていた（『百姓令嬢』）。

—Так точно: я не имею права подвергать себя смерти. Шесть лет тому назад я получил пощечину, и враг мой еще жив.

Любопытство мое сильно было возбуждено.

—Вы с ним не дрались? —спросил я. —Обстоятельства, верно, вас разлучили?

「その通りです。私は自分を死にさらす権利を持っていない。六年前に私は平手打ちを受け、そして私の敵はまだ生きています。」私の好奇心が強く刺激された。「あなたはその人と決闘しなかったのですか」と私は訊いた。「おそらく状況があなたがたを別れさせたのですか」（『その一発』）。

Он ушел в свою комнату и стал размышлять о пределах власти родительской, о Лизавете Григорьевне, о торжественном обещании отца сделать его нищим и наконец об Акулине. В первый раз видел он ясно, что он в нее страстно влюблен; романическая мысль жениться на крестьянке и жить своими трудами пришла ему в голову, и чем более думал он о сем решительном поступке, тем более находил в нем благоразумия. С некоторого времени свидания в роще были прекращены по причине дождливой погоды. Он написал Акулине письмо самым четким почерком и самым бешеным слогом, объявлял ей о грозящей им гибели, и тут же предлагал ей свою руку. Тотчас отнес он письмо на почту, в дупло, и лег спать весьма довольный собою.

彼は部屋にさがって考え始め、親の権限のこと、リザヴェータ・グリゴリーエヴナのこと、彼を乞食にしてやるという父の厳然たる誓いのこと、そして最後にアクリーナのことを考えた。初めて彼にははっきりと分かった、自分が彼女に激しく恋していることが。農民娘と結婚して自分の労働で生きてゆくという小説じみた考えが彼の頭に浮かんだ。そして考えるほどに、この断固たる行動がますます分別あるものに思われてきた。林でのあいびきは、このところしばらく雨続きの天気のため中止されていた。彼はアクリーナに、非常に明確な字体と非常に乱れ狂った文体で手紙を書き、二人が直面した破滅について彼女に説明した、そして、その同じ手紙で続けて結婚の申し込みをした。すぐさま彼はその手紙を郵便局に、

あの木の洞へ持って行き、それから、自分にたいへん満足して寝床に入った（『百姓令嬢』）。

Мы сели. Разговор его, свободный и любезный, вскоре рассеял мою одичалую застенчивость; я уже начинал входить в обыкновенное мое положение, как вдруг вошла графиня, и смущение овладело мною пуще прежнего. В самом деле, она была красавица.

私たちは座った。彼（伯爵）の話は自由で好もしく、じきに私の野育ちの内気も散らされた。私はすでに普段の私の状態になり始めていたが、その時突然、伯爵夫人が入ってきたので、前より一層ひどく狼狽が私をとらえた。実際、彼女は美しかった（『その一発』）。

Мысль о неразрывных узах довольно часто мелькала в их уме, но никогда они о том друг с другом не говорили. Причина ясная: Алексей, как ни привязан был к милой своей Акулине, всё помнил расстояние, существующее между им и бедной крестьянкою; а Лиза ведала, какая ненависть существовала между их отцами, и не смела надеяться на взаимное примирение. К тому же самолюбие ее было втайне подстрекаемо темной, романическою надеждою увидеть наконец тугиловского помещика у ног дочери прилучинского кузнеца.

切れない絆で結ばれているという考えは、かなりしばしば二人の念頭にひらめくものだったが、しかしそれを語り合つたことは一度もなかった。理由は明らかだ。アレクセイは、かわいい自分のアクリーナにどんなに惹かれていたとしても、自分と貧しい百姓娘との間の隔たりをいつも覚えていた。一方リーザは、父親同士の間にある憎悪がどのようなものかを知っていたので、両家の和解には望みをかけられなかった。その上、彼女の自尊心が、最後にはトゥギロヴォの領主がブリルチノの鍛冶屋の娘の足下に跪くのを見たいという怪しげな小説風の望みによって、ひそかに挑発されていた（『百姓令嬢』）。

Мысль о смерти того или другого также мелькнула в уме моем, и я приближался к станции*** с печальным предчувствием.

どちらかの死という考えも私の頭をかすめ、私は哀しい予感とともに***駅に近づいていった（『駅長』）。

(3) 3 C. 事態・状況が主語の場合

前述の2 A.においても状況に関する表現があったが、2 A.に動的な状況が多かったことと比較すると「計画」「事情」「しきたり」など静的な状況が多い。それだけに、今までの事態を一語でまとめつつ、しかもそれを主格主語とすることで、静的状況の描写がおちいりやすい退屈さを回避していると考えられる。つまりこれらの主語は、冗漫さを避け、物語の調子をよくする効果を持たされている。これは、特に西欧風の表現であるというよりは、プーシキンの個人的特徴であると考えられる。たとえば、今までの事態を一語でまとめて主語に据えつつ、その主語で始まる一文に二、三の新しい情報を一度に盛り込み、しかも十語前後からなる短文でまとめる、といった技法は、プーシキン独自の文体上の軽さを生じさせている。

Малое число книг, найденных мною под шкафами и в кладовой, были вытвержены мною наизусть. Все сказки, которые только могла запомнить ключница Кириловна, были мне пересказаны; песни баб наводили на меня тоску. Принялся я было за неподслащенную наливку, но от нее болела у меня голова; да признаюсь, побоялся я сделаться пьяницею с горя, т. е. самым горьким пьяницею, чему примеров множество видел я в нашем уезде. Близких соседей около меня не было, кроме двух или трех горьких, коих беседа состояла большею частию в икоте и воздыханиях. Уединение было сноснее.

戸棚と物置から見つけ出された少数の本は私によって暗記された。女中頭のキリーロヴナが覚えているすべての昔話が私に繰り返し語られ果てた。百姓女の歌は私を憂うつにした。私は甘味をつけない果実酒をたしなみ始めたが、そのせいで頭痛がしてくるのだった。しかも本当を言えば、悲しくて大酒家になる、つまり「悲しい飲んだくれ」（ロシア語の熟語で「どうにもならないひどい飲んだくれ」の意味）になる勇気はなかったのだ。どうにもならない「悲しい飲んだくれ」ならば郡内に私は多数の実例を見ていた。二、三の「悲しい」以外に私の周りには近い隣人がなかった。その人たちとの対話は大部分がしゃっくりとため息からなるものだった。一人きりの方が、より我慢ができた（『その一発』）。

《Господа, —сказал им Сильвио, —обстоятельства требуют немедленного моего отсутствия; еду сегодня в ночь; надеюсь, что вы не откажетесь

отобедать у меня в последний раз. Яжду и вас, — продолжал он, обратившись ко мне, — жду непременно».

「みなさん」とシルヴィオは言った、「状況が私のすぐ去りゆくことを余儀なくさせています。今夜出発します。私のところに最後の食事にどうぞいらして欲しいと思います。あなたもお待ちしていますよ」と彼は私にむかって続けた、「必ずお待ちしております」(『その一発』)。

Первый, к кому явился он, отставной сорокалетний корнет Дравин, согласился с охотой. Это приключение, уверял он, напоминало ему прежнее время и гусарские проказы. Он уговорил Владимира остаться у него отобедать и уверил его, что за другими двумя свидетелями дело не станет.

最初に彼が姿を現したのは四十男で退役騎兵少尉のドゥラヴィンの所で、ドゥラヴィンは喜んで同意してくれた。この冒険は彼に過ぎた時と驃騎兵時代の悪ふざけとを思い出させる、と彼は断言した。彼はヴラジーミルを強いて食事に引きとめて、他の二人の立ち会人など造作なく見つかるとうけあった(『吹雪』)。

Марья Гавриловна долго колебалась; множество планов побега было отвергнуто. Наконец она согласилась:

マリヤ・ガヴリーロヴナは長い間躊躇していた。たくさんの駆け落ちの計画が退けられた。最後に彼女は同意した(『吹雪』)。

Владимир уже не существовал: он умер в Москве, накануне вступления французов. Память его казалась священной для Маши; по крайней мере она берегла всё, что могло его напомнить: книги, им некогда прочитанные, его рисунки, ноты и стихи, им переписанные для нее. Соседи, узнав обо всем, дивились ее постоянству и с любопытством ожидали героя, долженствовавшего наконец восторжествовать над печальной верностью этой девственной Артемизы.

ウラジーミルはもはやこの世にいなかった。彼はフランス軍侵入前夜、モスクワで死んだのだ。彼の思い出はマーシャにとって神聖なようだった。少なくとも彼女は、かつて彼に読まれた本、彼の手ずさび、彼が彼女のために写してくれた楽譜と詩句など、彼を思い出せるも

のすべてを大切にしていた。これらのことを知った隣人たちは、彼女の忠実さに驚き、また、好奇心をもって、この処女アルテミスの悲しい貞操についに勝利するべき英雄を待ち受けていた（『吹雪』）。

Другая печаль ее посетила: Гаврила Гаврилович скончался, оставя ее наследницей всего имения. Но наследство не утешало ее; она разделяла искренно горесть бедной Прасковьи Петровны, клялась никогда с нею не расставаться; обе они оставили Ненарадово, место печальных воспоминаний, и поехали жить в***ское поместье.

別の不幸が彼女を見舞った。ガヴリーラ・ガヴリーロヴィチが彼女を全財産の相続人にしてみまかったのだ。しかし遺産は彼女を慰めなかった。彼女は哀れなプラスコーヴィヤ・ベトロヴナ（母）と真心からの悲しみを分かち合って、決して彼女とは別れないと誓うのだった。彼ら二人は悲しい思い出の地ネナラドヴォを去り、***の領地に移り住んだ（『吹雪』）。

Прошло несколько лет, и обстоятельства привели меня на тот самый тракт, в те самые места. Я вспомнил дочь старого смотрителя и обрадовался при мысли, что увижу ее снова. Но, подумал я, старый смотритель, может быть, уже сменен; вероятно, Дуня уже замужем.

何年か過ぎ、ある事情が私を同じ国道の同じ場所にみちびいた。私は老駅長の娘を思い出し、再び彼女に会えるという考えに嬉しくなった。しかし、と私は思った。老駅長は多分もう交替したかもしれないし、ドゥーニャはもう嫁に行ったかもしれない（『駅長』）。

Разговор между нами касался часто поединков; Сильвио (так назову его) никогда в него не вмешивался. На вопрос, случалось ли ему драться, отвечал он сухо, что случалось, но в подробности не входил, и видно было, что таковые вопросы были ему неприятны. Мы полагали, что на совести его лежала какая-нибудь несчастная жертва его ужасного искусства.

私たちの間での話題はしばしば決闘に触れたが、シルヴィオ（と彼を呼ぶことにしよう）はその話題には決して口を出さなかった。決闘したことがあるかという問いには、彼はそっけなく「ある」と答えていたが、詳しい話はせず、そうした質問は彼には不愉快であるように

見えた。彼の良心には、何者か彼の恐るべき腕前の不幸な犠牲者が横たわっているらしい、と私たちは推測していた（『その一発』）。

Прошло несколько лет, и домашние обстоятельства принудили меня поселиться в бедной деревеньке Н*** уезда.

数年が過ぎ、家庭の事情が私をN***郡のある貧しい村に移り住むことを余儀なくさせた（『その一発』）。

Вдруг важное происшествие чуть было не переменяло их взаимных отношений.

突然、大事件が、あやうく二人の交際を一変させるところだった（『百姓令嬢』）。

Главное упражнение его состояло в стрельбе из пистолета. Стены его комнаты были все источены пулями, все в скважинах, как соты пчелиные.

主な彼の日課はピストルの射撃練習であった。彼の部屋の壁は弾丸で蜂の巣のように一面孔だらけにすり減らされていた（『その一発』）。

Мы стояли в местечке ***, Жизнь армейского офицера известна. Утром ученье, манеж; обед у полкового командира или в жидовском трактире; вечером пунши и карты. В*** не было ни одного открытого дома, ни одной невесты; мы собирались друг у друга, где, кроме своих мундиров, не видали ничего.

私たちは***という小さい町に駐屯していた。地方師団の将校の生活は知られている。朝は教練、馬術、昼食は連隊長の官舎かまたはユダヤ人の小料理屋で、夜はボンス酒とカード。***町には（舞踏会をやるような客たちに）開かれた家は一つもなかったし、年頃の娘も一人もいなかった。私たちは互いの宿に集ったが、そこは自分たちの軍服姿以外何も見られなかった（『その一発』）。

この段落の動作主体は「私たち」、すなわち、小さな町に駐屯する将校たちである。しかし мы（私たち）という人称代名詞はこの段落に二度しか用いられてい

ない。

Для барышни звон колокольчика есть уже приключение, поездка в ближний город полагается эпохой в жизни, и посещение гостя оставляет долгое, иногда и вечное воспоминание. Конечно, всякому вольно смеяться над некоторыми их странностями, но шутки поверхностного наблюдателя не могут уничтожить их существенных достоинств, из коих *главное: особенность характера, самобытность* (individualité), без чего, по мнению Жан Поля, не существует и человеческого величия. В столицах женщины получают, может быть, лучшее образование; но навык света скоро сглаживает характер и делает души столь же однообразными, как и головные уборы.

こうしたお嬢さんたちには、馬鈴の響きがすでに冒険であり、近所の町に出かけることが生涯の画期的事件であり、客の来訪が、長い間の思い出、時々は永遠の思い出を残す。もちろん、彼らにいくらか変なところがあると笑うのは自由だが、しかし、表面的な観察者のちゃかしは彼女らの本質的な長所を減ばせはしまい。その長所の中での主要なものは「性格の特異性、独自性 (individualité)」であり、ジャン・ポールの意見によれば、それなくしては人間の偉大さは存在しないのだ。都会の女性はおそらくもっと良い教育を受けている。だが、世間のしきたりが間もなく性格を平らしてしまい、心情が髪型のように均一なものになってしまうのだ (『百姓令嬢』)。

上記の文章においてД л я б а р ы ш н и とはじまる最初の行は、散文であるにもかかわらず詩の技巧が用いられ、四脚のアンフィブラヒイのリズムになっている。そのため美しく活気ある響きが生じ、来訪や外出の際のはずむような楽しさに韻律が調和して、あたかも音楽の伴奏のついた散文のようである。アンフィブラヒイのパターンが意識的に書かれたのか無意識にそう書いてしまったのかは不明だが、その韻律にあう語の選択が行われた結果、主語が人物でなくз в о н や п о е з д к а になったということも考えられる。

上記の例に関してさらに述べると、言葉の響きの重要性に関しては、以下に引用される通りである「然し、言語の意味は独立にその機能を発揮し得るのではなく、必ずや、それは本質的には不可分の音声と結びついている。しかも音声は意味を伝えるという機能の外に、独立な意味をもち得る場合があることを知らねば

ならぬ。-中略- 詩の技巧の場合に、syllabic sound と呼ばれる詩行中の子音や母音の一定の反復、或は頭韻や脚韻による一定の音声の響き合い、再発等が、夫々特殊な情緒的意味や暗示を読者の心の中に喚び覚して、その詩全体の意味構造に寄与する事実は、誰しも知っていることである⁽⁶⁾。

このことは、詩においてのみならず散文においてもまた、充分にありうる。言語は意味を伝えるだけではないため、その個々の語の音、響きもまた、語の選択に影響するのである。川崎隆司は、ツルゲーネフ『その前夜』冒頭が短長格ヤムブとなっていること、ゴーゴリにもハレイが見られたりすることなど、詩格が散文に現れることもあると指摘している。また彼は「プーシキンは、音節力点詩の枠組に、それまで乏しかった感情の真実を、対話の真実を、そして実生活を盛り込んでいった⁽⁷⁾」とも述べている。

4. おわりに

拙稿で取り上げられた機能動詞の問題は、外来の文章表現の借入という観点からも解釈されたが、それがフランス語、ドイツ語、英語の影響のいずれであったかということよりはむしろ、その文体が十九世紀初頭のロシアにおいて持っていた西欧風、外国風の印象にこそ着目すべきである。これらの構文やコロケーションは、新たに必要とされ待たれている近代文学言語として、西欧言語の影響を受けつつ試みられていた。ドプロボルスキーによれば、格の用法では限定的には変化はあるが、プーシキン時代からロシア語文法は基礎的には変わっていない。また、たとえばグリボエードフが用いているのにプーシキンはもう用いていない構文がある、など、プーシキンの言語はより現代語に近いという。「興味深いのは、プーシキンの文法が、他のたくさんの同時代の作家たちと比較して、より現代的だと受け止められることだ」と彼は述べている。プーシキンは同時代人の中でも、待たれている新しい文体の構築に積極的であり、またかなり強い使命感を持っていた。その一方でプーシキンはゲーテ『若きウェルテルの悩み』やルソー『新エロイズ』などの影響をも受け、ババーエフの表現によれば「散文の思考、散文の思想⁽⁸⁾」が生じた言語を構築しており、それが、たとえば『エフゲニー・オネーギン』の三章以降に表出しているが、それはあくまでも、ルソーの諸著作が十八

世紀ロシアに広まっていたこと⁽¹⁰⁾に象徴される当時のロシアの識字社会の中で、フランス語の哲学書、教養書や文学があたかも教科書のようにロシアで読まれ、ロシアの知識人の中にはそれを原語で暗記している者も少なくなかったという状況下においての話であった。つまり、彼の執筆活動以前からロシアの読者層に西欧言語の要素が浸透してしまっていた結果、仮にできる限り「西欧かぶれ」ではないロシア語を作ろうと志向したとしても、意図しないフランス語の影響が書き手の言語上にとどまり易かったのである。機能動詞の用法は、その統語上の影響の一現象としてもとらえられる。フランス語その他西欧の言語文化、また西欧からの思潮や精神性、思考心情の新しい型は、それほど影響力を持っていた。プーシキンはこのような社会にあってフランス語とロシア語のバイリンガルとして育ち、フランス語の書籍を原語で不自由なく熟読したような人物であり、決してフランス語的要素を積極的に自分の文学言語に受容させようとしたのではないが、彼自身のロシア語への西欧言語の影響は不可避となってしまった、と解釈すべきである。

そして、彼の文体の「軽さ」は、機能動詞もまたその表現の一手段として取り入れられた可能性はあるが、それをもって西欧言語の直接的な影響の結果であるとまでは言えず、「軽い」ことの要因は他に求めるべきであるように思われる。すなわち、プーシキンの文体の「軽さ」は、3Bや3Cに見られたような主語の設定の意外性、語のコロケーションの意外性、動詞の使用頻度のいわば非常識な高さ、語の組み合わせの自由度の高さ、それらによる迅速な新情報の出現、そして何より散文に見られる韻律性⁽¹¹⁾によって構築されていったと考えられる。

注

- (1) 頻度辞典において、быть「である」の変化形が頻度順位40位前後から見られ、сказать「言う」の変化形が116位から、спросить「問う」の変化形が184位から見られるのに対し、иметьの変化形は、最も頻度の高い男性形の過去形が651位、次いで一人称現在形が940位という頻度順位である。См. Частотный словарь русской литературы (ロシア文学語彙頻度辞典), Содержит слова, взятые из 447 произведений прозаиков и поэтов XIX-XX веков (十九世紀から二十世紀のロシア文学447作品の語彙から作成)

[<http://folk.uio.no/dansh/norway/fregrus.html>].

- (2) 本稿における文例はすべて十九世紀初頭のプーシキン散文作品からの引用であるため、本文中には作家名を省略し作品名のみ付記する。出典はアカデミー版プーシキン全集である。

А.С.Пушкин *Полное собрание сочинений* Академия наук СССР Л., 1978.

- (3) 金子えつこ「プーシキン「スペードの女王」の文体の特殊性について」四国学院大学『論集』116号 2005年3月 266頁。

- (4) マイルズ (Josephine Miles) の研究については以下の著作の51-52頁に詳しい。李 絳「文体分析の概観と実践—ヘミングウェイ、ダフィ、コープの作品を中心に—」齊藤兆史編『言語と文学』朝倉書店2009。

- (5) Д. О. Добровольский “К динамике узуса (язык Пушкина и современное словоупотребление)” *Русский язык в научном освещении*. No. 1 М., 2001 p. 161-178.

- (6) 吉武好孝「伝達の機能より見た詩と散文」『コトバ 言語・文学・教育』1936年7月号 文学社 33頁。一部旧仮名遣いを改め引用した。

- (7) 川崎隆司『ロシア詩の歴史—古代からプーシキンにいたる』1993年 恒文社 293頁。

- (8) 註(5)を参照。

- (9) Э. Г. Бабаев *Творчество А.С.Пушкина* МГУ 1988 p. 84.

- (10) Yu.ロトマン 佐々木寛訳「ルソーと18世紀ロシア文化」『思想』1982年1月号 岩波書店 88-110頁。

- (11) すでに3.C.の最後でも触れたように、韻律性の問題もまた文体構築の上で重要である。カツツはメロディーかハーモニーか、という問いを投げ、プーシキンにおける音楽について論じている。Борис Кац *Одиннадцать вопросов к Пушкину* СПб. 2008 p.8-31.

また、ペンコフスキーは、プーシキン作中の動と静、深刻と笑い、人物と非人物といったパラドクスや対比が「音声的」としているが、このような対比は、プーシキンに見られる「遊び」的な、いわば軽やかな本質に根ざしていると考えられる。これについては今後の課題としたい。А. Б. Пеньковский *Загадки пушкинского текста и словаря: опыт филологической герменевтики* М., 2005 p.225.